

要旨

西夏文字は、西夏語の表記のため、11世紀に一度に創製された。西夏文字の部首とその意味は、現在でも判然としないものが少なくない。また各部首の筆画に関しても、西夏人の認識を示す資料は残らず、漢字筆画からの類推で導き出されてきた。現代の西夏文字字典類では、画数引き・部首引きの索引が一般的であるものの、それらの字形・画数の中には疑わしいものもある。本考察で扱う部首は、従来、カタカナの「ノメメ」のような筆画を縦に配置した「5画」部首とされてきた。それらは、偏つまり文字の左端だけでなく、中央・右端にも位置する。

報告者は西夏文原文を実見するうち、当該の部首の中に、ひらがな・カタカナの「くくノ」を縦に組み合わせた、つまり「3画」の筆画が含まれることに気づき、西夏時代の字典類から当該の部首を調査した。結果、「飛ぶもの」を示す「ノメメ」型部首と、「偉大なもの」を示す「くくノ」型部首が併存し、異なる意符であること、それぞれ偏以外の位置でも同様の意符となることが分かった。

1. 西夏語と西夏文字

西夏文字は、チベット・ビルマ語派に属した死言語、西夏語（概要は西田 1989, 2012 など参照）の表記のために創製された文字である。西夏国（11～13世紀）滅亡後も、西夏語とともにしばらく存続したものの、使用者は絶え、20世紀初頭に解読されるまでその姿が判明しなかった。

西夏文字は、契丹・女真文字などとともに「疑似漢字」とされるが、漢字と共通する字形もほぼ無く、「表語文字」ではあるが「文字要素に象形性を欠く」という興味深い特性を持っている。部首という概念で文字が分析されるため、漢字の会意・形声文字に相当する造字を数多く行っている。1文字が1音節であり、1語乃至1形態素である点は漢字と同様である。

𐰽 ¹ne: 「心」¹

𐰽 「心」 + 𐰽 「失くす」 = 𐰽 「忘れる」

書字方向は主に縦書きで、右行から左行に進む。個々の文字は、おおよそ現在の漢字の筆順のように、左上から左下・右上を経由して右下へ書かれる。字種は約6,000字が確認されている。主に楷書体の書体が用いられ、多くの写本・刊本が残っている。西夏語文献は仏典が多数を占めるものの、漢語音韻学に倣った韻書・韻図も何種類か現存する。最も欠損が少なく、異なる版本も残るといふ、西夏文字研究にとって有用な韻書は『同音』²である。本稿2節末でも言及する。

なお、本稿では西夏文字を示すため、既存のフォントだけでなく、スキャンした図版³も掲載する。内容を鑑み、あえてノイズ除去などの修正は行っていない。

¹ 以降、西夏文字の推定音も示す場合は荒川 2014 に基づく表記とする。上付き数字の1は「平声」、2は「上声」という声調を表す。

² 研究者によっては『音同』と訳す。これは当該書籍の題名 𐰽𐰽 を「音・同じ」（主・述）と解釈するか、「音←同じ」（名詞・形容詞）と解釈するかによる。

³ 俄羅斯科學院東方研究所聖彼得堡分所ほか編 1997（以降、『黒水』7）より。

2. 西夏文字の部首と筆画－問題の所在

西夏文字は11世紀初頭、一度に創製された文字体系である。漢字に倣った「部首法」やそれによる造字法を取り入れているものの、部首の意味範疇や形状は当然漢字と異なる。西夏文字の部首には、位置する場所（漢字の偏・旁・冠などに相当する）によって字形・筆画が変化する「可変部首」とでもいうべきものと、どのような位置でもそれらが変化しない「不変部首」とでもいうべきものがある。

可変部首の例)「水」偏・旁・冠

𪛗「水」 𪛘「深い」 𪛙「血」 𪛚「バター」 𪛛「汚泥」

不変部首の例)「否定」偏・旁

𪛜「無い」 𪛝「禿」 𪛞「無い」 𪛟「静寂」

西夏文字の部首については、創製当時の認識を体系的に記した資料が現存しないため、後代の研究者が、文字の意味から、共通する部首がある場合にはその意味するところを推測する形で「部首とその意味」を確定させてきた。ただし、研究の進んだ現在でも、意味が判然としない部首は少なくない。




一方、これら西夏文字の部首を成り立たせる「筆画」に関しても、西夏人自身の認識を示す資料は残っておらず、漢字筆画からの類推で導き出されてきた。『夏漢字典』などの現代の字典類では、便宜上「画数引き・部首引き」の索引が一般的であり、広く利用されている。

ただし、既存の字典索引における字形・画数の中には、疑わしいものがあることも事実である。本考察で取り上げる部首は、先行研究でカタカナの「ノメメ」のような筆画を縦に配置した「5画」部首とされてきた。この部首は代表的な偏の一つとして認知され、『夏漢字典』（李編 2008）では120を数える字形がこの偏を持つとされる。一方この部首は、偏つまり文字の左端だけでなく、中央・右端に位置することもある。その場合も「5画」の「不変部首」とされてきた。

当該の部首の既存フォント字形

𪛠「神通」 𪛡「鶴」 𪛢「雀」 𪛣「皇帝」 𪛤「神」 𪛥「燕」

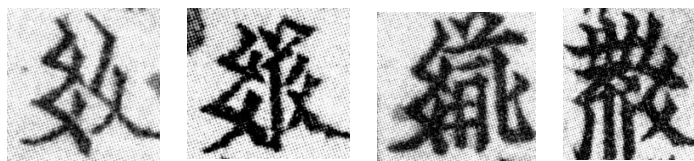
現代の各種字典の索引部には、5画の「当該要素のみの独立した字形」とされている文字（爻）が存在し、この文字の意味さえ分かれば、それが部首となった時にどのような意味を持つか、一見簡単に判明しそうである。しかし次の二点から、そう単純な問題ではないことが分かる。一点目は字形である。索引やフォントの字形は「ノメメ」のような筆画を縦に配置した字形（爻）になっているものの、『同音』新版などで確認すると下の図版のような形であり、カタカナで示せば「ノナメ」、つまり3画目が左上から右下への斜め払いではなく左から右への横棒のようにも見える。

フォント字形  vs 原文  『同音』新 (38A65) ,  『文海雜類』(7.242) 4

二点目に、その意味は「腰」であり、今回調査対象となった約250字のうち、「腰」と関係のある文字はほとんどない（𪛦 khwya「腎臓」など1, 2例?）。つまり、この字形は形からも意味からも、本考察で対象とする部首とは言い難い。

4 図版は『黒水』7: 47, 169より。以降『同音』記載箇所は、図録のページ数は省略し西夏研究者に一般的な表記とする。「38A65」であれば「38葉目右頁6行目上から5文字目」を指す。

報告者は西夏文原文を実見するうち、当該の「5画」部首の中に、ひらがな・カタカナの「くくノ」⁵を縦に組み合わせたような、つまり「3画」の筆画が含まれることに気づいた。



『黒水』7より（意味他は後述）

そこで報告者は、『同音』『文海』といった、西夏時代の代表的な字典類を調査し、この類の字形を調査した。西夏語文献『同音』『文海』は本来韻書⁶、つまり発音字典であるものの、西夏文字の規範字形を示すものとして、誤りの少ない資料といえる。『同音』『文海』ともに資料の利点、欠点を有する。『文海』は漢語韻書『広韻』に倣ったもので、字形の簡単な分析と説明があるものの、全体の半分強しか現存しない。『同音』は新旧2種類以上が完本に近い状態で残る。ただし字形に関しての説明は持たない。『同音』は旧版と新版⁷で文字の配列が異なる個所があり、音節の再整理によるとされる。しかし本考察からも明らかなように、字形をより規範的な形に修正した形跡も見える（本稿3. 末参照）。

3. 原文の調査

報告者は2020年2月、サンクト・ペテルブルグの東洋文献研究所において各種韻書から対象となる文字を実見調査できた。本稿ではやや不鮮明ではあるものの、字形は『黒水』7の図版から示したい。

当該の部首は、A) 偏、つまり左端に位置する、B) 旁、つまり右端に位置する、C) それら以外、つまり中央に位置する、あるいはABからの派生字（ABの上に冠などが付く）の3種類に大別できる。Aは『夏漢字典』（李2008）の部首索引、BはКычанов 2006の「旁」引き索引を活用し、Cはそれらの索引を通読して報告者が選定した。すると、A約120種、B約50種、C90種弱が調査対象となる。⁸

ABCから任意に図像を示すと、「ノメメ」型部首も「くくノ」型部首も併存することが確認できる。

「ノメメ」型部首



「くくノ」型部首



それぞれの部首をABCに持つ文字の意味も調べると、特定の共通点が見いだせる。次に、一般的な西夏文字コード番号、既存の西夏文字フォント、新旧『同音』原文（史・克恰諾夫主編1997図録より）と記載位置、字義をいくつか挙げる。報告者の判読した、当該部首の筆画を「ノメメ」か「くくノ」かでも示した。

⁵ 西夏文字に「ノメ」型筆画と「くノ」型筆画があることは荒川（2018）参照。


⁶ 韻書としての構成、文字配列については荒川2014：研究編70-76参照。

⁷ 本報告の内容上、一般に「甲種本」とされているものを「旧」、「乙種本」を「新」とする。




⁸ 𐵓「燕」、𐵔「婦母」はAとしてカウントした。

「ノメメ」型部首




A

文字番号	フォント	『同音』旧	『同音』新	字義	筆画
2270	𦏧	 03A38	 04A28	「鳥の名 (麻?)」	ノメメ
2462	𦏨	 07B22	 08A58	「蜂」	ノメメ

B




5640	𦏩	 39A51	 39B36	「鳥の名 (鴉)」	ノメメ
1106	𦏪	 04A35	欠損	「燕」	ノメメ

C





5190	𦏫	 05A42	欠損	「鷺」	ノメメ
5420	𦏬	 20A23	 21A13	「鷹」	ノメメ

「くくノ」型部首

A

3294	𦏭	 04A27	欠損	「賢」	くくノ
3683	𦏮	 31B61	 32B15	「明後日」	くくノ

B

1084	𦏯	 42B68	 43B23	「十 (数字)」	くくノ
1080	𦏰	 48B72	 49A57	「聖、賢」	くくノ

C

3150	𦏱	 12B15	 13A73	「皇帝」	くくノ
0309	𦏲	 31B61	 32B15	「義理の兄弟」	くくノ

「ノメメ」型部首は「飛ぶもの」、「くくノ」型部首は「偉大なもの (特に日・親族に関わることが多い)」に関係している。紛らわしい字形の部首であるものの、実は画数も、表す意味範疇も異なる「意符」であることがわかる。前者は「鳥」の名称に多く含まれるものの、𦏨「蜂」、𦏧「矢」、𦏩「煙」、𦏪「汗」などの一部ともなるため、「飛ぶもの」の意符と推定する。



「ノメメ」型部首と「くくノ」型部首を持つ字形のペアの例

文字番号	フォント	『同音』旧	『同音』新	字義	筆画
3684	𦉳	 39A51	 39B36	「鳥の名 (隼?)」	ノメメ
3683	𦉳	 31B61	 32B15	「明後日」	くくノ
4456	𦉴	 13A21	 13B77	「大 (-雁)」	ノメメ
4457	𦉴	 50A11	 50A72	「大きい」	くくノ



西夏文字字形の中で、これらの両部首だけが異なり、意味も異なるという、「最小対」となる文字はごく少数であり、文脈から語義が誤解される可能性は低い。このため現在の字典・フォントに到るまで、「ノメメ」型一形式で記されているが、実用上困ることがなかった。しかし西夏文字の字義の正しい理解のためには、「ノメメ」型部首と「くくノ」型部首の区別は重要であるとする。

また、『同音』の新旧を比べると、旧版で「ノメメ」型部首と「くくノ」型部首の区別が不明瞭だったもの、部首誤っていた可能性があるものが、新版で修正されていることが明らかになった。いくつか抽出した原文を示す。

「ノメメ」型部首を持つ字形から「くくノ」型部首を持つ字形への修正の例

文字番号	フォント	『同音』旧	『同音』新	字義	筆画
3332	𦉴	 39B18	 39B68	「引く」	ノメメ→くくノ





「くくノ」型部首を持つ字形から「ノメメ」型部首を持つ字形への修正の例

文字番号	フォント	『同音』旧	『同音』新	字義	筆画
3324	𦉳	 39A51	 39B36	「鳥の名 (隼?)」	くくノ→ノメメ





4. 派生字の検証

「ノメメ」型部首と「くくノ」型部首ともに、派生字形を持つ。これらも字形が確認できるものは全て検証した。

「ノメメ」型部首と派生字の字形のペアの例

3242	𦉵	 07A78	 08A46	𐌆bi 「癡狂な」	ノメメ
2868	𦉶	 07B11	 08A47	𐌆bi 「病」	ノメメ ※同音派生字

「くくノ」型部首と派生字の字形のペアの例

3612	𦉑		29A68		30A34	「藁膏」	くくノ
4273	𦉒		29A67		30A35	「茶」	くくノ












これらも原文を調査すると、元字に「ノメメ」型部首と「くくノ」型部首の区別があった場合は、派生字においてもそれらの区別があったことが確認できた。

5. 「ノメメ」型部首と「くくノ」型部首の区別が認識されなかった原因

荒川 (2018) では、西田 1966 (「西夏文字小字典」)、李 1997 (2008, 2013)、Кычанов 2006 など、先行研究の字典・辞典も、「ノメ」型と「くノ」型の区別が無く、「一ノメ」(また「一ノノメ」)(4画・5画)としている理由に関して、『西夏國書字典音同』(羅 1935) という、『同音』を清書・印刷した資料が諸研究者に利用された(西田 1964, 1966 や李 1985 などはこの資料に基づく)ものの、羅の誤りが踏襲されてしまったことを述べた。本考察で扱った、実際には二種類の部首についても、同様の原因で一種類とされてしまったことがわかる。

実際、『同音』新旧の写真図版(『俄蔵』7より)で西夏文字原文を確認すると、「くくノ」型だったことが分かる。これと後代の研究者の文字を比較検討すると、羅 1935 以降「ノノメ」型に解釈されていることも確認できる。3. で挙げた例を利用し、少し示しておきたい。

本稿で扱った「くくノ」型が、羅 1935 以降「ノノメ」型に誤解された例

文字番号	フォント	『同音』旧	『同音』新	『音同』(羅 1935)	『同音研究』(李 1985)
3294	𦉑		欠損		
1084	𦉒				
3150	𦉑				

6. 結論と今後の課題

西夏文字の、この微細な筆画の差異(「ノメメ」型と「くくノ」型)は、文字全体の弁別レベルでは機能しないため、後代の研究者による筆画でも重要視されなかったと考えられる。『文海』『同音』といった、西夏時代の代表的な字典類から、当該の文字を調査・検証した結果、次のことが分かった。

- 1) 「ノメメ」型部首も「くくノ」型部首も併存する。
- 2) 「ノメメ」型部首は「飛ぶもの」、「くくノ」型部首は「偉大なもの(特に日・親族に関わることが多い)」を表し、異なる意符である。
- 3) 「ノメメ」型部首も「くくノ」型部首も「不変部首」であり、偏以外の位置にあっても、同様の意符となる。

西夏文字字形の中で、これらの両部首だけが異なり、意味も異なるという、「最小対」となる文字はごく少数であり、文脈から語義が誤解される可能性は低い。このため現在の字典・フォントに到るまで、「ノメメ」型一形式で記されていても、実用上困ることがなかった。しかし西夏文字の字義の正しい理解のためには、「ノメメ」型部首と「くくノ」型部首の区別は重要であるとする。

荒川 (2018) では、一見類似する「ノメメ」型部首と「くくノ」型部首が異なるものとして区別されていたことを論じた。これは純然たる「字形」の研究であり、音や意味が関与する単位（一般に部首と呼ばれる単位）とは無関係だった。しかし本考察では、字形の相違が意味の相違に関与していることを論じた。

西夏文字の字形・筆画については、既存のフォントや現行の字典・索引にも全幅の信頼を置けるとは言えない。今後も子細な点まで字形を実見調査していく必要がある。

図版略題

『黒水』 7 : 『俄羅斯科學院東方研究所聖彼得堡分所藏黒水城文獻』 7

参考文献

荒川慎太郎 2014 『西夏文金剛經の研究』, 松香堂

_____ 2018 「西夏文字における、いくつかの左下要素の筆画について」『日本言語学会第 157 回大会予稿集』, 日本言語学会: 442-447

俄羅斯科學院東方研究所聖彼得堡分所, 中國社會科學院民族研究所, 上海古籍出版社編 1997 『俄羅斯科學院東方研究所聖彼得堡分所藏黒水城文獻』 7, 上海: 上海古籍出版社

Кычанов, Е. И. (составитель), Аракава С. (со-составитель) 2006 Словарь тангутского (Си Ся) языка: *Тангутско-русско-англо-китайский словарь*, Kyoto: Faculty of Letters, Kyoto University.

李範文 1985 『同音研究』, 銀皮: 寧夏人民出版社

李範文編 1997 『夏漢字典』, 北京: 中国社会科学出版社 (増補修正本 2008, 簡明版 2013)

羅福成 1935 『西夏國書字典音同』, 旅順: 庫籍整理處

西田龍雄 1964, 66 『西夏語の研究—西夏語の再構成と西夏文字の解説』 I, II, 座右宝刊行会

_____ 1989 「西夏語」『言語学大辞典』中卷(亀井孝・河野六郎・千野栄一編著), 三省堂: 408-429{西田 2012 に修訂再録}

_____ 2001 「西夏文字」『言語学大辞典 別巻 世界文字辞典』(河野六郎・千野栄一・西田龍雄編著), 三省堂: 537-547

_____ 2012 『西夏語研究新論』, 松香堂

本研究は、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同利用・共同研究課題「アジア文字研究基盤の構築(2)—文字学に関する既存術語の再検討」、科学研究費補助金挑戦的研究(萌芽)「アジアの文字研究を対象とした、「字形」研究基盤の構築」(代表: 荒川慎太郎)の成果の一部である。ロシアにおける調査については同科研によるものである。調査の便宜を図っていただいたイリーナ・ポポーヴァ所長、キリル・ボグダノフ博士に深くお礼申し上げます。